

古代王権の誕生

II 東南アジア・南アジア・アメリカ大陸編

角田文衛／上田正昭 監修
初期王権研究委員会 編



第二章 考古学から見た北インドにおける都市化の諸相

第一節 インダス文明の解体と北インド

ここでは、考古資料をもとに、西暦紀元前一千年紀を中心として北インドのガンジス川流域に成立した都市とその歴史の意義について考察し、国家あるいは王権の形成について理解する一助としたい。

考古資料の中心をなすさまざまな器物は、生産から供給、消費にいたる多様な過程を経ており、その過程において諸々の社会の様相が埋め込まれている。同様に、遺跡にも社会のあり方が反映されており、特に都市遺跡は王権や国家と深く関係している。こうした点に注目すると、考古学的に国家や王権といった問題にアプローチすることが可能となる。また、社会・文化の物質的側面に見られる長期的な変化を検討することによって、文献史料の研究とは異なる視点からの考察を行うことができるであろう。ここでは、都市形成を含めた都市化の問題を焦点に据え、都市・国家形成期の北インド社会の様態について考えることにしたい。

本稿では「都市化」という用語を、最終的に都市の形成へといった社会変容全体を指し示す用語として用いる。また、「都市化」という用語の中には、都市の形成だけでなく、国家や王権の成立も含めておきたい。というのも、都市化という一連の社会変容の中に国

家や王権の成立を可能にした基盤が潜在していると考えるからである。

なお、本稿で用いる時期区分は、王朝年代を除いて、考古資料に依拠して画定したものであり、表1を参照されたい。

西アジアでメソポタミア文明やエジプト文明が成立した前三千年紀には、南アジアでも都市文明であるインダス文明が栄えていた。しかし、インダス文明は前二千年紀に入ると衰退し、都市は廃棄され、小規模な集落からなる社会へと変容する。都市を失うことによつて、かつてはインダス文明として一つに統合されていた地域も、地域間のつながりを維持できなくなり、より狭い地域に展開する地域文化が南アジア各地に見られるようになる。⁽¹⁾

本稿で取り上げるガンジス川流域は、インダス文明の影響が稀薄かあるいは及ばなかった地域であった。インダス文明が栄えた頃、ガンジス川流域では新石器文化が成立し、その後前二千年紀中頃に銅器の製作を開始し金石併用文化へと展開する。その過程は連続的なものであつて、北インドの自然環境の中で独自に発展したものである。前二千年紀初頭までには、稲の栽培も行われていたよう⁽²⁾で、農耕社会が次第に形成されつつあつた。

このように、北インドではインダス文明衰退後、新たな文化展開

表1 北インドの時期区分

絶対年代	北インド編年	ガンジス川 上流域	ガンジス川 中上流域	ガンジス川 中流域	ガンジス川 中下流域	ヒマラーヤ 山脈南麓	都市	土器	土偶	
500A.D.	VI期	ポスト・グプタ朝以降							赤色土器主体 の土器様式	土偶の出現・ 発展
	VI期	グプタ朝併行段階					都市の衰退			
	V期	クシャーン朝併行段階					都市の最盛期			
A.D.	IV期	NBPW後期					都市の成立・ 発展	精製土器の 衰退		
500B.C.	III期	PGW後期		NBPW前期					精製土器の 発展	
	II期			BRW・BSW後期						
1000B.C.	I期	PGW前期	鉄器の出現				地域間交流の 発達・拠点集 落の形成	精製土器の 発展		
			BRW・BSW前期							
1500B.C.		ハラッパー 系文化	断絶		新石器文化 (BRW)					
			OCP	?		?				

の動きが芽生え始めていた(図1)。それは即座に都市を築き上げることはなかったが、新たな文化要素を生み出しながら、続く前一千
年紀の都市化への基盤を準備していた時期であった。

第二節 北インド都市化の技術的基盤

食糧生産力の整備

さて、いかにして都市が形成されたのか検討する前に、北インド
の都市化の技術的基盤について概観してみよう。

都市化を可能にする基盤として社会の食糧生産力がある⁽²⁾。一義的
には、食糧生産者を住民としない都市の存立を可能にするためには、
その背景として食糧余剰が重要である。それは社会の構成員全てに
余剰がもたらされる状態を意味するのではなく、一部の中心地に食
糧が集中される状態を示す⁽³⁾。それは、食糧生産の増大や人口増加に
伴って、生産された食糧を管理し、社会的資源とする権力が形成さ
れることを意味している。

インダス文明期には、コムギ・オオムギ・マメ類の栽培とウシ・
ヒツジ・ヤギの牧畜を生業基盤としていた。前二千年紀初頭まで
は、インダス川流域から北インドにかけて点的に稲栽培の証拠が
認められており、稲とミレット類からなる夏作物とムギ・マメ類か
らなる冬作物の二毛作が開始されていたと考えられる⁽⁴⁾。この二毛作
は安定した食糧生産をもたらず上で重要である。したがって、前二
千年紀前半には、その後の食糧生産の基本的形態は確立されていた
と考えてよい。問題は食糧生産力の増大という点にある。

稲作の導入後直ちに生産力が増大したわけではない。前二千年紀

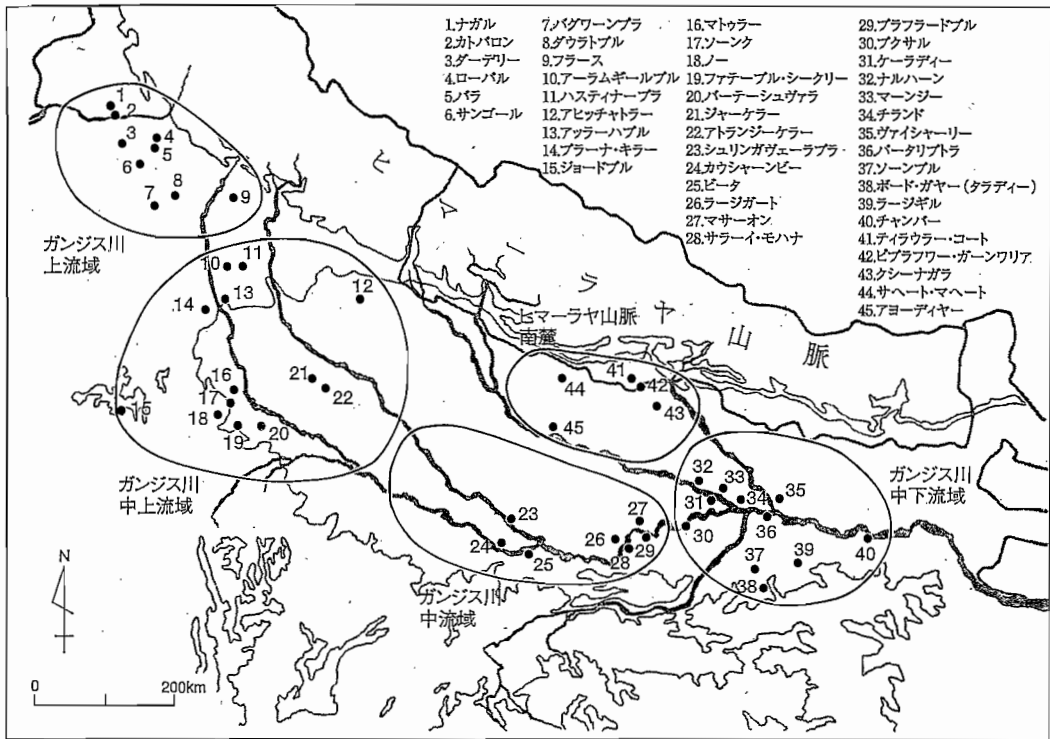


図1 北インド遺跡分布図

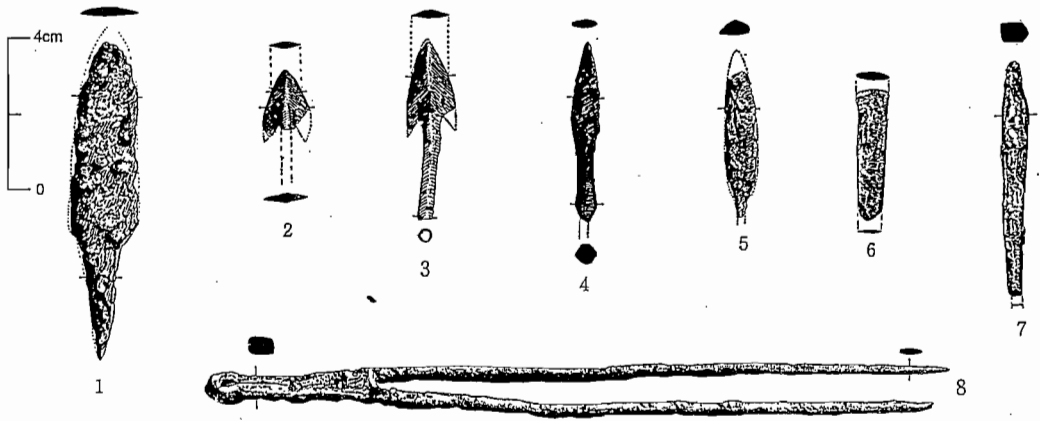
未まで集落規模は小さい上に、集落規模の階層分化も明確ではなく、集落単位の自給自足的な食糧生産であったと考えられる。生産力の増大を可能にするには、さらなる技術的革新、すなわち鉄器の導入が必要であった。鉄器の導入によって森林の伐採から開墾、耕作の効率化が進み、耕作地が拡大することによって生産力が向上したのである。

鉄器の使用

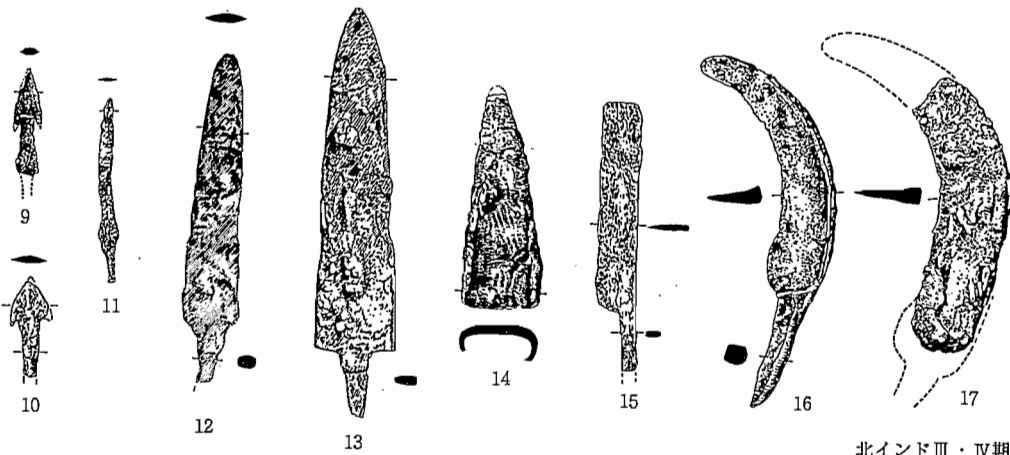
近年、南アジア各地で発掘調査が進み、鉄器の起源に関しても新たな知見が得られている。鉄器の南アジア自生説を唱えるD・K・チャクラバルティは、インドにはデカン高原を中心に鉄鉱資源が豊富にあり、銅器製作の技術を持つ人々ならば、鉄鉱資源を独自に開発することも可能と主張している。仮に技術的基盤が整っていたとするならば、人々が鉄器の有用性を積極的に認め、鉄器導入・普及の契機が生じたということになる。

初現期の鉄器の資料は限られているが、比較的良好な資料が出土しているガンジス川中上流域のアトランジーケラー遺跡などの例で見ると、前一千年紀前葉の段階で、鉄鍬・槍先を中心とした武器類と鎌を主体とした農具、斧・手斧を中心とした工具類、火ばさみ状道具などの日用品が出土している(図2)。武器類は戦闘の存在を示し、農具類は生産性の向上と関連している。硬質の鉄器は耕作地の開墾や収穫物の刈り取り、森林地の伐採などの効率を向上させたであろう。

かつて、ガンジス川流域は森林に覆われており、耕作地を拡大するためにはその伐採・開墾が不可欠であった。また、考古学的に確



北インドⅡ期



北インドⅢ・Ⅳ期

図2 北インドの鉄器主要器種 (アトランジーケラー遺跡出土 1:4)

1・12・13:槍先、2-5・9-11:鉄、6・7:鏢、8:火ばさみ状道具、14・15:刀子、16・17:鏢

認された例はないが、耕作地への水路の確保や治水は、氾濫や河川の流路の移動が頻発するガンジス川流域の沖積平野では不可欠であったと考えられる。

また、耕作地だけでなく、居住地の開発にとっても鉄器の導入は欠かせないものであった。前一千紀に入ると、遺跡数が増えるとともに、それまで居住されていなかった地域に集落が拡散する。こうした状況は、生産力の増大に伴う人口の増加と、それに伴う人の移住・分村が行われたことを示している。鉄製農工具の使用による開墾は、そうした移住・拡散の過程において大きな意味を持つものであった。こうしたプロセスの繰り返しによって、食糧生産が効率化・増大し、社会の規模が拡大していくこととなる。

鉄器導入期にあたる前一千紀前葉の鉄器生産の様相は判然としないが、前一千紀後葉には鉄器生産は確実に高揚する。ヒマラヤ山脈南麓の都市であるマヘート遺跡や中央インドの都市ウツジャイン遺跡では、この時期に、遺跡北半部において半貴石製玉・ガラス玉の製作とともに鉄器が集中的に製作されていた。この段階では鉄器生産が都市の中に取り込まれ、集中的に生産されていたのである。また、後一千紀前葉のタクシラ遺

跡では、鉄製の容器や工具などのさまざまな日常用具が出土しており、鉄器が生活の諸々の分野に普及していったことが知られる。

稲作の普及と鉄器の導入は、当該時期の生産力の増大や集落地の拡大・拡散、さらには社会規模の拡大に重要な役割を果たしたと評価できる。しかし、ここで注意しておきたいのは、こうした食糧生産技術・生産効率の向上と生産量の増大が社会の複雑化や社会規模の拡大の決定要因ではないということである。結果的に、現象面だけに注目すれば、生産力の増大は社会の変容を引き起こす一要因となつてはいるが、むしろ評価すべきは、鉄器を使用して集落地・耕作地を拡大し、生産力を高めようとした社会集団の意思である。諸々の技術を積極的に導入し、生産力を増大させながら、社会の規模を拡大しようとする社会集団の意思こそが、技術の向上、生産力増大を引き起こした最大の要因と考えられるのである。

それでは、そうした社会の規模を積極的に拡大させようとした社会は、いかにして誕生したのであるか。次節において、そうした社会の成立の過程を見てみよう。

第三節 都市化への社会変容

都市化には、さまざまな現象が含まれている。都市の形成はもとより社会構造・政治組織・経済システム・精神文化など、さまざまな分野での変化を伴う。

都市とは、地域構造の点から見ると、地域を統合する中心地として定義することができる。都市は周辺村落を含めた地域の中で政治的・経済的あるいは文化的な中心地として機能し、地域を一つの有

機的統合体とする役割を担っていた。

一方、一つの都市は、隣接あるいは遠隔の都市と結び付き、地域間をつなぐ結節点として機能する。文献史料によると、北インドでは、都市に稀少品から日常雑貨品までを生産する工人や、商品を流通させる商人が居住していた。彼らは、器物を製作するための原材料の調達から製作、流通にいたる一連のプロセスに携わり、都市の生産物を周辺地域、さらには遠隔地へと供給する役割を果たしていた。都市間のつながりはそうした流通を円滑にしたのである。このように都市を起点とする地域内・地域間交流によって、地域が結び付けられていた。

都市を含めた中心地の活動によって地域間交流が発達し、地域間の情報伝達が促進された結果、広範な地域が一つの文化圏を形成するようになる。まさにこの地域統合の過程、すなわち地域構造の変容こそが都市化の本質である。

それでは、北インドではどのようにして地域間交流が活発化し、地域統合が進行していったのであろうか。まず長期間にわたる変化を時空間軸上において把握できる土器を取り上げて、その様子を探ってみることにしよう。

土器に見る北インド社会の構造

先述のように、インダス文明の衰退以後、北インドには地域性の強いさまざまな文化が並立することになる。西半部では、多かれ少なかれインダス文明の文化要素を継承した文化が、東半部ではインダス文明の影響を受けなかつた新石器文化・金石併用文化が展開していた。こうしたインダス文明後の北インドの様相に変化が生じる

のが前二千年紀後半である。この変化は、北インド東半部におけるBRW(黒縁赤色土器=Black-and-Red Ware)・BSW(黒色スリップがけ土器=Black Slipped Ware)を特徴とする金石併用文化、西半部におけるPGW(彩文灰色土器=Painted Grey Ware)を特徴とする文化が成立したことに端緒を持つ(図3)。

BRWとは、口縁部外面と内面が黒色、体部外面が赤色を呈する土器で、BSWは内外面ともに黒色スリップが塗布された土器である。いずれも器表面は平滑に仕上げられており、皿・鉢を主体とする食膳具によって構成されている(図4)。

北インドにおけるBRW・BSWは、前二千年紀前半の新石器文化に登場し、前二千年紀後半にガンジス川中下流域からガンジス川中上流域に広く分布する。ガンジス川中下流域から周辺地域へ拡散し、その拡散の過程で土器が精製化していく。

この文化の拡散は人の移住による可能性が高い。この文化が及んだガンジス川中上流域では、前二千年紀前半に赭色土器文化が存在したが、この赭色土器文化とBRW・BSW文化は文化的に断絶している。したがって、赭色土器文化が衰退したところへ東方からBRW・BSW文化集団がこの地へと移住し、新たな文化をもたらしたと考えることができる。

一方、PGW文化は前二千年紀後葉に東部パンジャブに出現したが、この文化は、同地域に先行して存在し一時的に共存した後期ハラッパー文化とは系譜的つながりを持たない。

このPGWは、皿と鉢を基本器種とし(図4)、きわめて丁寧に行われた薄手の精製土器である。土器は還元焰焼成によって堅く焼き

締められるとともに灰色を呈し、黒色彩文が施されている。

このように、前二千年紀後半の北インドでは、東西で精製土器が出現する。これらの精製土器はいずれも皿・鉢を基本器種としており、食膳具として用いられたものである。互いに食膳具であることから見ると、これらの精製土器が北インドに出現した段階にはすでに、両者の間で何らかの交流関係が成立していた可能性が高い。

前二千年紀前葉になると、PGW文化の拡大が生じる(図3)。PGWの分布域は東部パンジャブからガンジス川中上流域へと広がって代わる。しかし、少なくなるものの、BRW・BSWは一定量存在し続け、PGWを食膳具の主体とする土器の器種構成の中に組み込まれるとともに、またPGWの器形に影響を与えている(図4-26・27・32)。このように、この時期には、PGWが分布域を拡大しただけでなく、ガンジス川中上流域を核としてPGW文化とBRW・BSW文化の接触・交渉が活発化したのである。この接触・交渉の影響はガンジス川中上流域以外の地域にも波及しており、PGWがBRW・BSW文化圏に搬入されたり、模倣されたりする事例も確認されている。

前二千年紀中葉になると、BRW・BSW文化において変化が生じる。それはNBPW(北方黒色磨研土器=Northern Black Polished Ware)という新たな精製土器の創出である(図3・4)。このNBPWというのは、暗灰色から黒色を呈し、光沢のある器表面を特徴とする。技術的には、BSWの成形技法とBRWの焼成技法を基盤とし、器形的にはBSWを基礎として生み出された。実際、

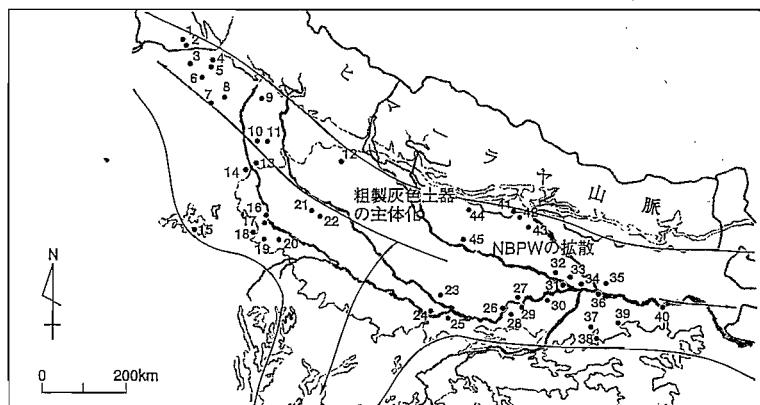
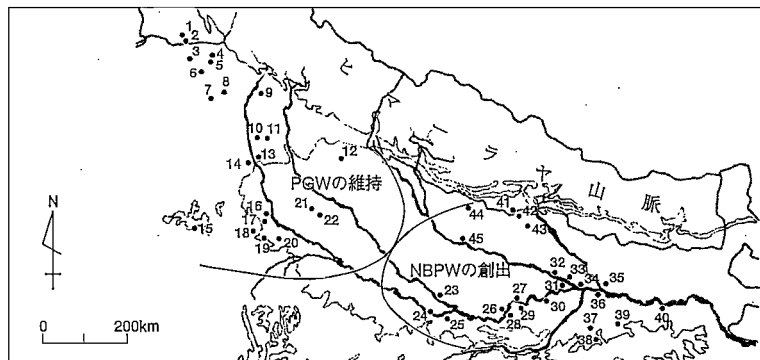
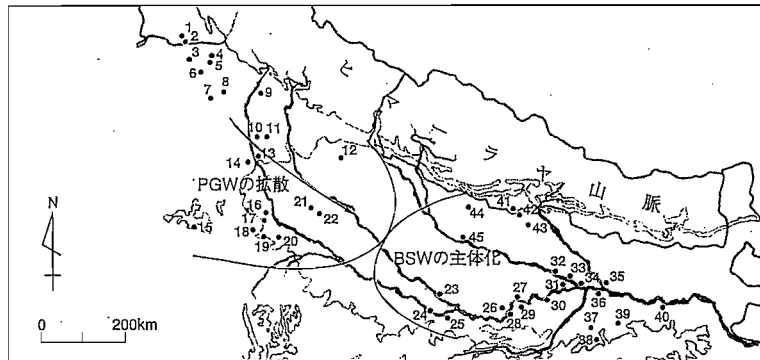
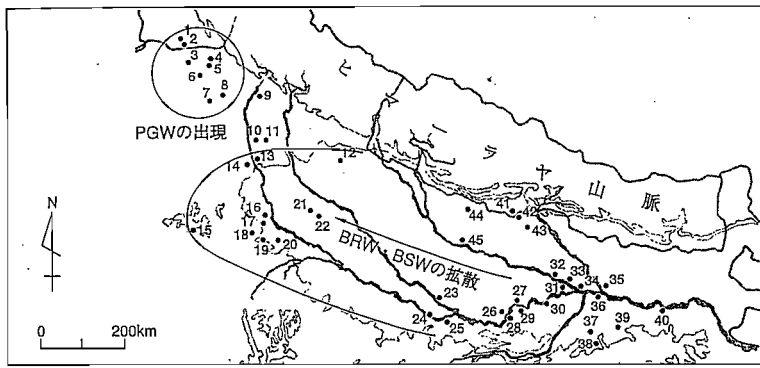
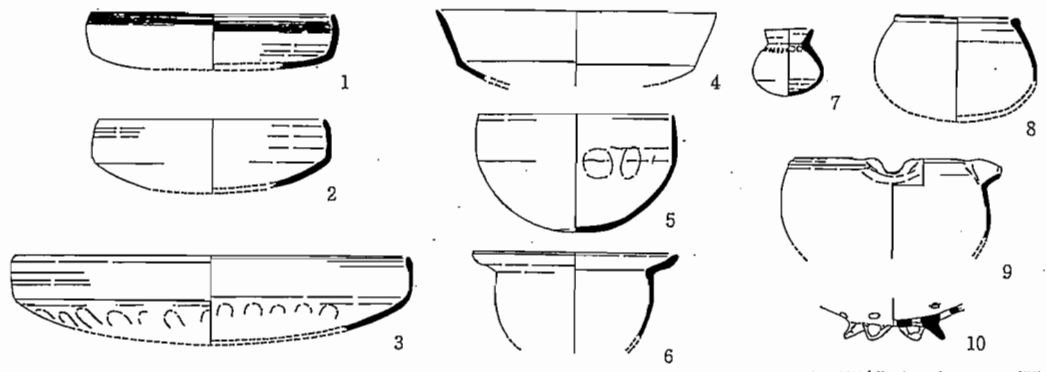
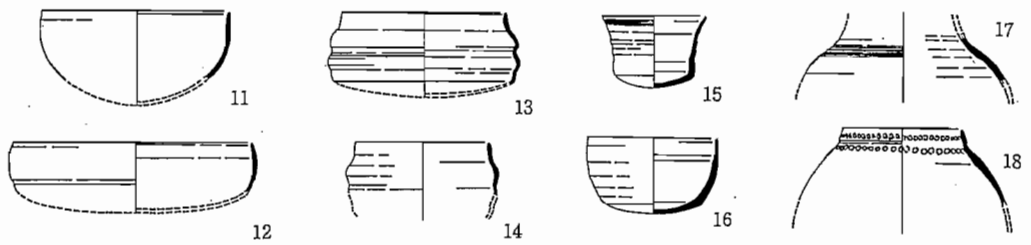


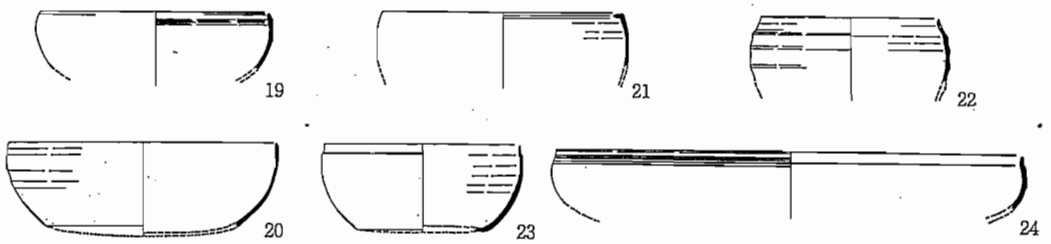
図3 北インドにおける土器の地域展開 遺跡番号は図1に共通する。



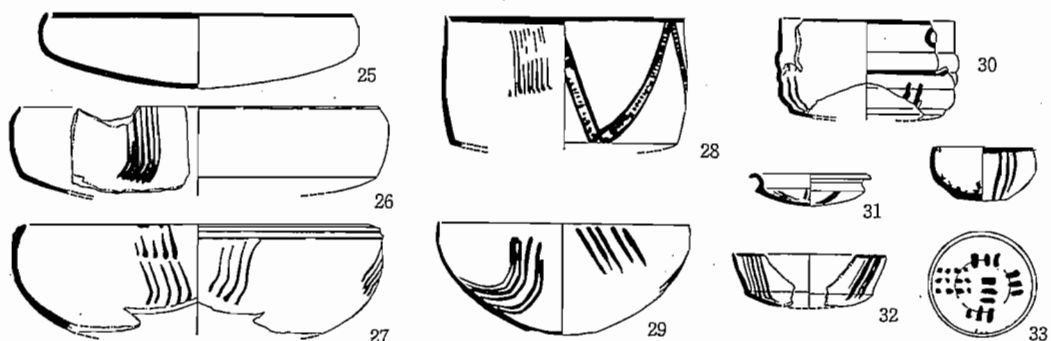
BRW(北インドⅠ～Ⅲ期)



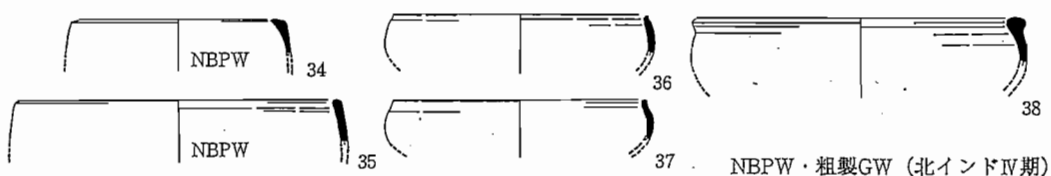
BSW(北インドⅡ・Ⅲ期)



NBPW(北インドⅢ期)

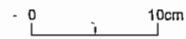


PGW(北インドⅠ～Ⅲ期)



NBPW・粗製GW(北インドⅣ期)

図4 北インドの精製土器主要器種(1:6)



NBPWの創出に先行する前八世紀頃には、BRW・BSW文化圏においてBRWに代わってBSWが精製土器の主体となる段階があり、直接的にはBSWがNBPWの祖形となっている。NBPWは素地の準備・表面調整ともにきわめて丁寧であり、精製土器の頂点ともいえる土器である。

前六世紀頃にこの土器が創出されると、BRW・BSW文化圏では齊一的にNBPWの主体化へと移行する。現状ではNBPWの起源地を断定できないが、特定の一部地域が突出してこの土器を創り出したというよりも、BRW・BSW文化圏全体の動向の中で生み出されたと考える方が妥当である。

ここに、西にPGW、東にNBPWという二大精製土器分布圏が成立することになる。それぞれの土器は明確に分布域を違えており、前代の精製土器の地域的差異はこの時期にも維持されている。

このような精製土器という北インド社会の一端を特徴付けた器物も、前三世紀頃になると衰退へと向かう(北インドIV期)。PGW・NBPWともに衰退・消滅するが、その変化は具体的には胎土の粗化、表面調整の粗雑化に見られる。また、精製土器の特徴の一つであった薄手の器壁も四―五ミリと厚くなる。同時に、粗製の灰色土器が出現する(図3・4)。

精製土器の衰退には二つの側面があり、一つは高度な技術による特徴的な外観を持つ精製土器に対する需要の消失、もう一つは精製土器の衰退による食膳具の変化である。前者は、製作者・使用者が精製土器によって表徴した社会的意味の消失であり、後者は皿・鉢という精製土器と直結した器種構成が解体し、食膳形態そのものが

変容したことを示している。

このように、精製土器の衰退は、精製土器の持つ社会的意味と実用機能の双方での変化を示す現象であった。すなわち、前一千紀後葉(北インドIV期)は、土器の持つ意味が象徴的・機能的に変化する時期と評価することができる。新たな動きは前一千紀後葉(北インドIV期)末に始まり、後一千紀前葉(北インドV期)における新たな土器様式の完成に見ることができ、精製土器様式から根本的な脱却と変化を示している。後一千紀前葉(北インドV期)の土器様式は、北インドを一つの社会単位として新たな志向性の中で生み出された土器様式であった。

土偶に見る北インド社会の地域間関係の様相

次に、土偶を取り上げて北インド社会の地域間関係について検討してみよう。

土偶は、土器と比較すると、より明確な形で社会・文化集団の精神的表徴としての性格が強い。一般的に土偶は祭祀や儀礼の場で見られた道具であるが、北インドの場合もやはりその可能性が高いというのも、豊富な装身具によって飾られた女性を表現したものが土偶の中心をなしており、地母神を表現したと考えられるためである。北インドでは、豊富な自然環境の中で、自然の豊饒性に対する信仰が生まれ、そうした自然信仰を基盤として諸々の宗教が生まれた。土偶は、そうした自然信仰を形象化したものと理解できる。

南アジアで見ると、土偶はインダス文明形成の発展以前から存在し、宗教行為に関連して用いられてきた。インダス文明期においても、多くの土偶が知られ、宗教的信仰の基盤の一端をなしていた。

マトウラー系



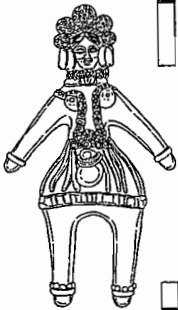
A I 形式
不定型の段階。



A II 形式
菱形スタンプによる
眼の表現を特徴とする。



B I 形式
顔を型によって
成形する。



B II 形式
スタンプ文の使用頻度が高くなり、
細部表現が緻密化する。



B III 形式
頭部全体を型によって成形する。



シュンガ系
型成形板状土偶
片面の型押しによって成形する。

ナーガ形土偶
円管文・沈線文による
単純な施文。



パータリプトラ系



I 形式
貼付を細部表現技法とする。
顔を型によって成形する。
脚下に粘土板を貼り付ける。



II 形式
I 形式に比較して小形。



III 形式
全体を型によって成形。
全体的に板状化する。

前300年頃

前200年頃

図5 北インドにおける土偶の変遷 (1:6)

ところが、インダス文明が衰退すると、土偶の使用も見られなくなる。

北インドに再び土偶が出現するのは、前一千年紀後半(北インドⅢ期末)のことである(図5・6)。この時期になると、同一の形態的特徴からなる定型化した土偶が地域的・時間的に広がりを持って製作・使用されるようになる。再び社会内部で土偶に対する安定した需要が生まれたのである。また、地域的な広がりを持つことは、精神世界の内容が広範な地域に共有され、その表徴としての土偶に対する需要が生まれたことを物語っている。土偶に対する需要とは、すなわち精神世界の一端を共通する形態的特徴によって表現し、そこに共通する意味を付与し認識することにほかならない。

土偶の具体的な変遷について見ると、最も早くに出現したのは、ナトガ形土偶と呼ばれるものである。このナトガ形土偶は、北インド東半部を中心に分布するが、ガンジス川下流域にまで及んでおり、きわめて広範な分布域を持つ。各地域の出土資料を見ると、沈線文と円管文の配置の仕方にこそ各個体で個性が見られるが、施文方法は共通しており、共通した土偶のイメージが地域的に変容することなく広がっている。

このナトガ形土偶の分布する範囲は、前一千年紀中葉(北インドⅢ期)のNBPWの分布範囲と一致しており、NBPWの分布範囲をままとりとして、ナトガ形土偶が展開したことを示している。

前一千年紀中葉(北インドⅢ期)末になると、本格的な人物土偶が出現する。人物土偶の展開には二つの中心地、すなわちマウリヤ朝の首都となったパタリプトラと、後にインド美術の一大センター

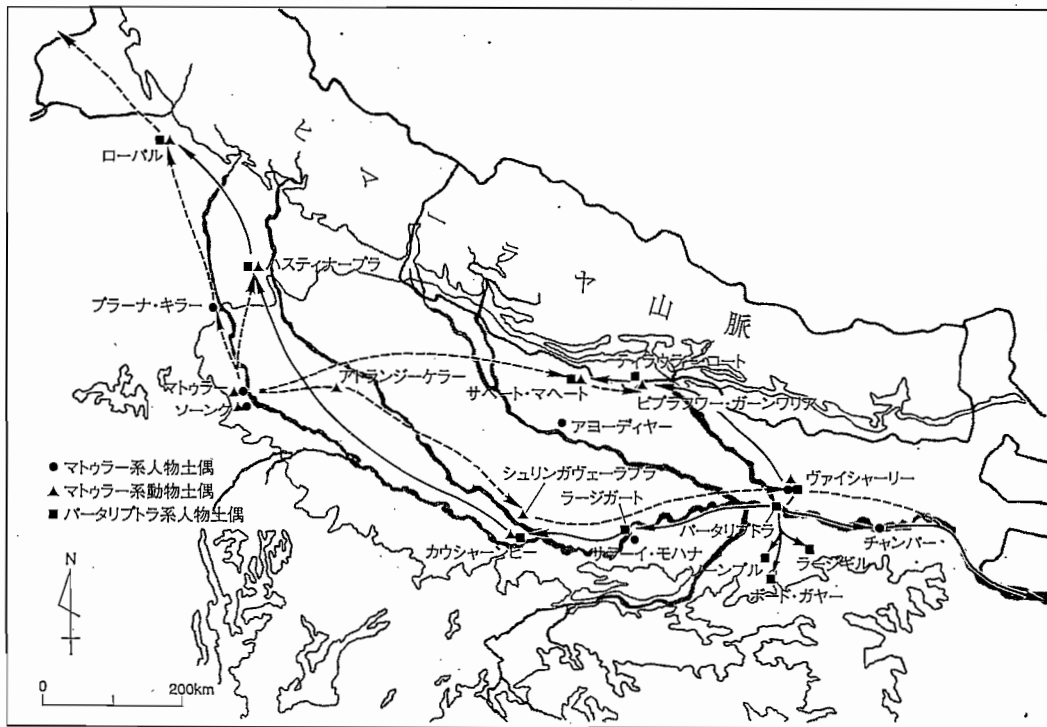


図6 北インドにおける土偶の地域展開(前一千年紀後葉=北インドⅣ期)

となったマトウラーである。それぞれ様式は異なるが、顔を型、胴部を手によって成形するという技法的特徴と、頭部を重視した細部表現を行うという表現的特徴を共有している。相違点としては、マトウラー様式の土偶が灰色を示す点とスタンブ文が多用されるという点がある。

パータリプトラ様式は三段階、マトウラー様式は五段階の型式変化が見られるが、いずれも顔のみの型成形から胴部、さらには全体一括型成形へと共通の変化の方向性が見られる。そうした型成形の範囲拡大は細部表現の細密化と関連しているが、より定型化した土偶が求められたことにも起因している。型成形化がより進んだ先にいわゆるシュンガ様式の型成形板状土偶が位置している。

分布について見ると、パータリプトラ様式の土偶は、パータリプトラ周辺のガンジス川中下流域を中心として、北インド東半部に分布する。おおむねナーガ形土偶と同じ地域に分布しており、その分布範囲は先述のように前一千年紀中葉(北インドⅢ期)のNBPWの分布範囲に相当している。パータリプトラ様式でも新しい段階になると、ガンジス川上流域まで分布を広げており、精製土器衰退後の北インド統一の土器様式の成立と軌を一にしている。すなわち、東から西へとこの様式の拡散が見られるのである。

一方、マトウラー様式は、マトウラーを中心としたガンジス川中上流域に分布が限られる。初現期のマトウラー様式土偶については、ガンジス川中流域にもその祖形と考えられる資料が分布しているが、定型化する段階(AⅡ形式)になると、マトウラー周辺に集中するようになる。パータリプトラ様式がガンジス川東半部に広く分布する

状況と対照的で、マトウラー周辺という限られた範囲の中で土偶に対する需要が高揚し、生産・供給システムが形成されたことを示している。マトウラーは北インドⅢ期の段階においてPGWが分布した地域であるが、NBPWの分布地域が地域内部のつながりを強く示すのに対し、PGWの分布地域では、土偶の広がり土器の地域的まとまりは作用しなかったようである。

マトウラー様式は概して狭域にとどまるが、点的にこの様式の要素を有する土偶が分布している。ガンジス川中下流域のヴァイシヤリー遺跡では、マトウラー様式の細部表現を持つ赤橙色系の土偶が出土し、ガンジス川中流域のブクサルを中心とするブクサル様式にはマトウラー様式の特徴であるスタンブ文が多用されている。きわめて点的な分布であり、パータリプトラ様式の面的な広がりとは異なっている。マトウラー様式を東方に拡散させる動きは存在したものの、完全にその要素を再現する形では伝播しなかったことを示している。

ところで、マトウラー様式の伝播に関して注目される現象がある。この様式ではゾウ・ウマを中心とする動物土偶がある(図7)、そうした動物土偶はマトウラー以外にも北インドに広く分布している。マトウラーで出土している動物土偶は人物土偶と同様に灰色を示すが、マトウラー以外で出土する動物土偶は赤橙色系の色調を呈しており、人物土偶同様に完全な要素の組み合わせで伝播しているわけではない。しかし、細部表現はマトウラー様式の技法を採用しており、人物土偶とは異なる伝播過程を経ているようである。人物土偶が欠落していく状況で、動物土偶に対する需要が北インドで斉一的

に高揚したことを意味するのであろう。

続く、シュンガ様式の型成形板状土偶の段階になると、北西インドからガンジス川下流域のベンガル湾岸まで共通する製作技法と圖像内容を持つ土偶が広範に広がる。

以上のように、精製土器や土偶は、地域社会に住む人々の間で一つの志向性が共有された結果、時間的にも空間的にも広がることのできたといえる。特定の精製土器あるいは土偶に対する志向性が人々の間に広がり、生産・供給システムが形成・維持されたことが、これらの器物の広がりとなって現出したものと理解できよう。

さらに、人々の間で志向性が共有されるには、志向性に関わる情報の伝達・共有が必要であり、そうした情報の伝達・共有システムが存在したことになる。特定の器物の広がりには、情報伝達・共有シ

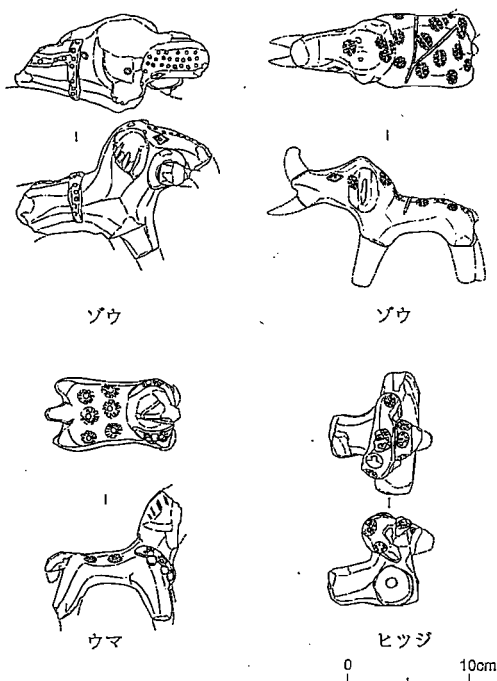


図7 北インドIV期におけるマトウラー系動物土偶
(マハート遺跡出土 1:6)

ステムの広がりと言い換えることができ、そうしたシステムを維持するための地域社会内部でのつながりを認めることができる。すなわち、特定の器物に対する志向性と生産・供給システムによって結び付けられた地域社会(集団)のあり方を見ることができよう。

第四節 都市の形成と国家の成立

都市の形成過程

それでは、北インドに都市はどのようにして誕生したのであるか。前二千年紀後半に現出した都市化への動きがピークに達したところに都市の成立を位置付けるならば、都市成立以前の動向に注目する必要がある。北インドでは、都市の成立は前一千紀中葉に措くことができる。その根拠は、一つには仏典を中心とする文献史料に都市の存在が言及されていること、いま一つは考古学の調査成果である。

都市形成の過程を地域構造の点から見ると、集落規模の変遷に注目できる。G・アードシーは、ガンジス川中流域に位置するアツラーハーバード県カウシャーンビー周辺での踏査成果に基づいて、前一千紀前葉(北インドII期)に二段階(一〇、二・八ヘクタール)、前一千紀中葉(北インドIII期)に四段階(五〇、一二、六・〇七・〇、〇・四二―二・〇ヘクタール)、前一千紀後葉(北インドIV期)に五段階(北インドIII期の階梯に三・〇―五・〇ヘクタールの規模が加わる)に及ぶ集落規模の分化を指摘している。発掘調査によるものではないため断定はできないが、一つの可能性として、都市化の過程において集落規模の差異化・階層化が進行し、拠点となる大

規模集落と衛星的な小規模集落へと分化していった状況を見ることが出来る。そうした分化が進行していく様子は、まさに地域空間の構造化と呼びうるであろう。

このように分化した集落規模は、文献史料に見る *gama* (村落) → *nigama* (町邑) → *nagara* (都市) という集落階梯¹⁴⁾の存在とおおむね一致している。これらの単語の存在は、当時の人々に概念として集落の階層性が認識されていたことを示しており、次第に集落規模が分化していく中で人々の空間認識が確立・固定化したことを物語っている。集落の違いが認識されるということは、単に規模の問題にとどまらず、それぞれの性格が異なっていたことを示すものであり、都市を中心として小規模な町邑・村落が有機的に取り込まれるという地域的・社会的空間構造が現出していた状況をうかがえよう。

さらに踏み込むと、それぞれの集落階梯に特有の性格を持った住民や、それぞれの集落階梯を管理・維持する権力組織の存在が想定できる。それらが有機的に連鎖する構造こそが、都市化過程における地域空間構造の特質と理解できるであろう。

北インドの都市遺跡の規模について考える時、一つの目安として都市域を区画する城壁の存在が挙げられる(図8)。北インドの都市遺跡の多くは城壁を有している。その造営年代を特定すべく、いくつかの遺跡で城壁の発掘調査が行われており、前一千年紀中葉から前一千年紀後葉という時間幅の中で、北インド各地の都市に城壁が造営されたことが明らかになっている。

都市にとって城壁の造営には二つの意味がある。一つは都市空間が固定されたこと、いま一つは周辺地からの隔絶性が確立したこと

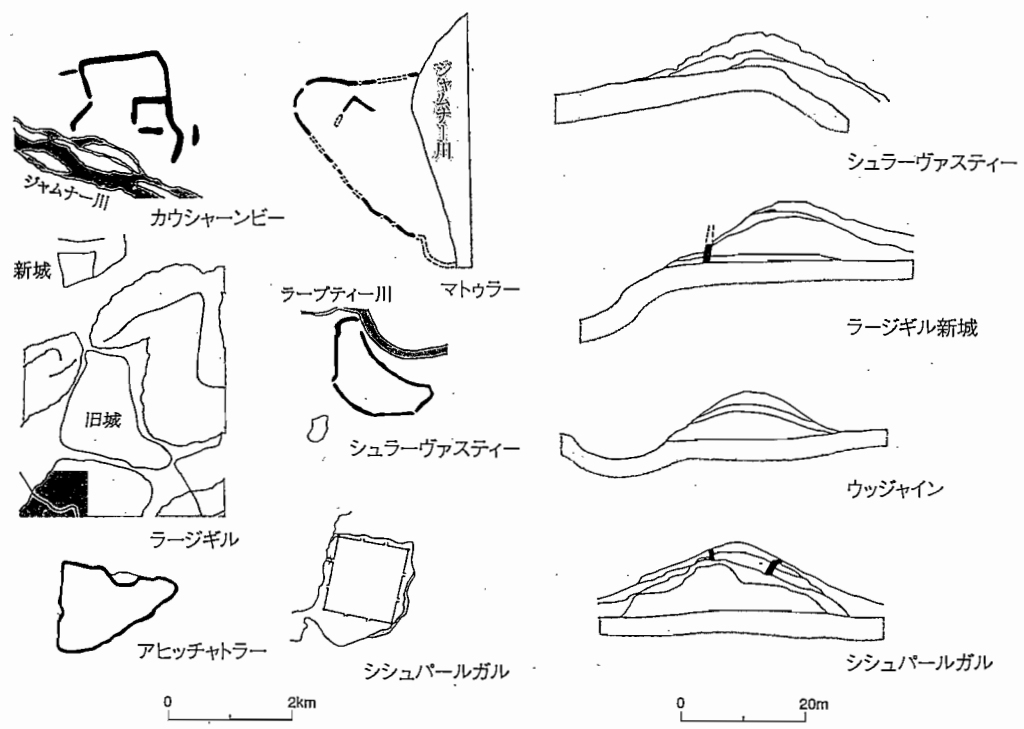


図8 北インドにおける都市遺跡 (左:1:120,000、右:1:1,200)

である。都市の範囲が固定されたことにより、その内部での空間利用のあり方が否応なしに規定されることになり、より明確な形で都市設計のあり方が求められたと想像される。

都市としての隔絶性は、まず視覚的な側面から評価できる。すなわち、視覚的には高さ五—一〇メートルにも及ぶ城壁によって囲まれていることで外部への威圧感を生み出している。さらに、城壁には城門が設けられており、人の出入りが管理されていたと考えると、そうした外部との隔絶性はより強く意識されたであろう。実際、城壁は都市の防衛上必要であったことは疑いえないが、防衛されるべき都市空間の重要性は威圧感ともなつて、都市という存在を誇示する道具であつたと考えられる。また、城壁は多量の労働力を投入して造営されたものであり、権力による地域統合のシンボルとしての意味も持っていたに違いない。

このように、城壁の造営は諸々の点で北インドの都市の発展過程における一つの画期であつた。すなわち、城壁の造営に、都市を取り巻く北インド社会の発展・成熟を見ることができるといえる。

城壁によって囲まれる都市遺跡の面積は、一五〇—二〇〇ヘクタールを平均値としている。その下位には一〇〇ヘクタール以下や数ヘクタール未満の集落が存在している。先のアードシールの研究を勘案すると、前一千年紀前葉と都市が成立した前一千紀中葉では、遺跡規模に格段の差があり、都市の成立に伴つて飛躍的に拠点集落の規模が増大したことがわかる。

このように、前一千年紀中葉に成立したと考えられる北インドの都市は、前一千年紀後葉までに城壁を備えるようになり、地域の中

心として発達する。城壁が築かれた都市は、後一千年紀前葉においても城壁を維持し、都市の威容を誇示し続けたが、後一千紀中葉には城壁を維持することもなくなり、衰退・廃絶する都市が現れる。都市の衰退は、政治的あるいは経済的にその存立基盤が失われ、同時に地域間交流のあり方も変容し始めたことを示唆している。特に、ヒマラーヤ山脈南麓の地域では、五世紀初頭に北インドを訪れた法頭の記録と考古学的発掘の双方において、四世紀以降都市が衰退・廃絶していく様子が見られる。さらに、六世紀頃までには、経済の繁栄を基盤とした北インドの都市は、社会の変化に伴つて衰退するかあるいは変容を余儀なくされた。

ここに古代型の都市の衰退を見ることができるといえる。すなわち、再び北インド社会の変革の時代が訪れたのである。

都市形成の背景としての地域間交流

先述のように、都市形成の要因の一つに地域の構造の変容がある。地域の構造は地域間の関係に規定されており、すなわち地域間交流の様相が都市形成あるいは都市化を考える手がかりを与えてくれる。地域間交流は直接的には人の移動によつてもたらされる。移住や交易、あるいは戦争などを介して地域間交流は生じるが、人の移動形態によつて地域間交流の性格は左右される。特に、地域社会あるいは社会集団の形成には、人の移動がある程度継続的に行われ、諸々の情報が伝達され共有される必要がある。人の移動に政治的・経済的要因が関与するにしても、情報の伝達・共有を安定化するシステムの成立が不可欠である。

こうした恒常的な情報の伝達・共有システムの一端は、精製土器

や土偶の展開に看取できる。それぞれの器物に関する諸々の情報の伝達・共有によって、それぞれの分布域が維持されていたと考えられる。そうしたネットワーク・システムは内部での情報の共有を維持する一方で、異なるシステムとの接触・交渉を行っていたことが土器・土偶の検討によって明らかになる。そうしたネットワーク・システムは地域集団を形成する一つの要因になっていたと考えられる。すなわち、特定の文化要素への志向性が地域集団を生み出していたと推測できるのである。

精製土器の分布にうかがわれる地域集団の動きを見ると、特定の精製土器を志向する集団は自らの精製土器を広範な地域へと拡散させる一方で、移住元との情報の伝達・共有を行っていた。すなわち、移住とともに情報の伝達・共有ネットワークの拡大が起こったのである。

換言すれば、精製土器盛行期の北インドでは、地域間交流の一端は情報ネットワークの形成にあり、そのネットワークをもとに地域社会が形成されていたのである。当然、精製土器以外にもさまざまな情報のネットワークが存在したであろうし、そうした諸々のネットワークの重層性の上に地域社会が成立していたと考えられる。

前一千年紀後葉にも、引き続き活発な情報ネットワークの維持が見られる。精製土器が衰退し、精製土器のネットワークは解体するが、新たなネットワークによって北インド各地を統一する土器様式が成立する。さらに、土偶には、土器とは異なるネットワークが形成されており、そのネットワークは複数で錯綜的なあり方を示している。より重層化したネットワークの存在が認められよう。

先述のように、情報のネットワークのあり方は、精製土器と土偶で異なっている。すなわち、精製土器の場合、各地域が等質的ながりを示しているのに対し、土偶では明確に中心地が形成され、地域間の関係に階層化が生じている。ここに地域間交流を支える地域構造の変容を垣間見ることができよう。

人の移住を契機とする北インドの地域間交流は、地域的な中心地を形成することによって発達し、さらにそれらの中心地を束ねるより求心的な中心地が形成されるにいたる。また、等質的な情報の流れからより階層的かつ錯綜的な情報のネットワークへと展開する。

そうした地域間交流の発達の中で形成された中心地は、情報ネットワークの結節点として、情報の流れを管理していた。そうしたネットワークの結節点としての機能が極大化したのが都市であった。政治(地域権力)・経済(生産・交易に従事する工人や商人)に携わる都市住民は中心地としての機能を最大化し、物流・情報の流れを担っていた。また、多くの人々が入り出すことによって多くの情報都市に流入し、それらの整理・管理が都市で行われていた。

前一千年紀中葉において精製土器の生産・供給を維持したのは各地の都市であったし、また土偶の展開を主導したマトゥラー、パトリプトラも北インド屈指の都市であった。諸々の情報を管理・発信することによって、都市は北インドの文化展開を主導する立場にあったのである。

このように、情報ネットワークは北インドの地域間交流を規定し、そのネットワークの発達が中心地さらには都市の存立基盤となった。さらに、都市は情報ネットワークの維持・強化を可能にし、北イン

ド社会は有機的な社会統合体となりえたのである。都市を情報ネットワークの結節点とすることによって、北インド社会の物質的側面は統合されることになった。しかし後一千年紀中葉に起こった都市の衰退によって地域統合は失われ、北インド社会は変貌を余儀なくされたのである。

第五節 北インド都市文化の成立とその意義

インド・アーリヤ語族の移住

北インドの都市文化がインダス文明崩壊直後の社会と大きく異なつたのは、人の移動を活発化させ、情報のネットワークを拡大させることができた点にある。ここに社会・文化の広域展開を可能にする要因が存在している。それでは、人の移動の活発化を促したのはどのような背景であつたのであろうか。

インド・アーリヤ語族の南アジアへの移住は前一五〇〇年頃とされてきた。しかし、近年の考古学調査の進展によって、前二千年紀前半にはそれまでに南アジアに存在しなかつた文化要素(例えばウマヤラクダの使用)が確認されるようになり、インド・アーリヤ人の移住の時期を遡らせる見解が提出されるようになってきた。

北インドに関していえば、以前からPGWがインド・アーリヤ語族の土器であると指摘されてきた。確かに、後期ハラッパー文化との関わりを持たない文化要素の存在は、文化系譜の異なる集団の登場を示唆している。しかしながら、PGW文化がインド・アーリヤ語族の文化と断定することは尚早である。インド・アーリヤ語族が移住の過程でどのように地域的に展開し、いかにして社会・文化の

物質的側面を生み出したのか、その実態が判然としないためであり、かつ言語集団としての存在を考古学的文化に直接的に対比できるのかという疑問もある。

考古学的には、前二千年紀前半以降、南アジア各地で新たな文化が出現し、北インドでは前二千年紀後半に新たな動きが現れたことが明らかである。そこでは、人の移動が活発化し、文化要素が広範な地域に及んでいく傾向がある。人の移動を活発化させる歴史的要因が存在したのである。直接的な対比はできないが、インド・アーリヤ語族の移住もそうした人の移動の活発化の一要因になつていたことは事実であろう。

文献史学の成果によれば、インド・アーリヤ語族移住後の北インドでは、部族制が発達し、さらにその中から勢力を得て王制へと移行していった集団が存在したことが指摘されている。さらには、一六大国の成立、マウリヤ朝による国家群の統一へと進展していく。その流れは、首長制社会から王権の成立・強化、政治的統合体としての国家の形成へと動く動きであり、考古資料に見られる地域間交流の展開と大きな齟齬を見せない。都市の形成にもそうした政治権力の発達が深く関与していたことは明らかである。都市の建設には、周辺地域からの労働力の調達が不可欠であり、そうした労働力の結集を可能とする社会権力が存在していたことは確かである。

国家を超える地域統合

しかし、ここで注目しておきたいのは、社会・文化の物質的側面が国家の範囲を越えた広がりを持つ点である。特に、一六大国の時代あるいは国家形成の前段階においてそれは顕著で、物質的側面に

見る地域統合は、部族や国家の枠組みを越えたレベルで展開している。逆に考えると、個々の国家が主導的に物質的側面の利用を図ることはなく、より基底となる部分で物質的側面に見る地域統合は生起していたといえる。

このことを念頭に置くと、都市の成立は政治権力の動向と深く関わる一方で、そうした国家の領域を越えたところでの社会統合を促進する役割を担っていたと理解できる。すなわち、国家は自らの領域に閉鎖的に存在したのではなく、他の地域あるいは国家と積極的に接触・交渉を行っていたのである。都市はそうした接触・交渉の結節点となることによって、国家の政治的拠点として機能していたと理解できよう。

マウリヤ朝の成立は、政治的なレベルで見ると、北インドの都市のあり方に首都と地方都市という階層構造をもたらし、より大きな地域の枠組みの中での中心と周辺という関係を生み出したが、個々の都市の存立基盤自体には変化を与えなかったと考えられる。というのも、都市はマウリヤ朝による政治的統一以後も地域の拠点として機能し、地域間交流の結節点としての役割を果たしていたからである。

前一千年紀後葉、後一千年紀前葉を通して、北インド各地の都市が繁栄していたことは、考古資料から明らかである。マウリヤ朝、シユンガ朝、さらにはクシャーナ朝の諸王朝の統治下における北インド内部の支配構造あるいは都市のあり方については判然としないが、北インド各地の都市では城壁の維持・管理が行われ、都市内部では活発な建物の造営が行われている。政治的には地方となっても、

地域間交流においては都市は北インドを一つの社会・文化として纏め上げるためのつなぎ材として機能し、北インドの地域統合を維持したのである。したがって、都市が維持される背景には、地方統治はもとより、他地域との恒常的な接触・交渉を維持するための社会権力が都市には存在したといえるであろう。

むしろ、諸王朝による政治的統一は、都市間のネットワークと都市を頂点とした地域構造によって支えられていたと理解できる。また、経済活動についても同様であり、都市を媒介とした恒常的な地域間交流が存在しなければ、円滑な経済活動は成立しえなかったと考えてよい。より適切に表現するならば、政治的統合・経済活動は地域間交流によって支えられるものであり、逆にまた地域間交流は政治的統合・経済活動によってその一端を形成されるものであったのである。そうしたフィードバックシステムが北インドの社会・文化的統合すなわち都市化の存立基盤であったのである。

注

- (1) 小西正捷・近藤英夫「南アジアの暗黒の時代」の解明（講座文明と環境五 文明の危機）東京、朝倉書店、一九九六
- (2) 藤田弘夫「都市の論理 権力はなぜ都市を必要とするか」（東京、中公新書、一九九三）
- (3) 藤田弘夫注（2）前掲書
- (4) 近藤英夫「南アジア稲作農耕の考古学的展望」（『東海大学紀要 文学部』第五七輯、東京、一九九二）
- (5) CHAKRABARTY, D.K., *The Early Use of Iron in India* (Delhi, 1992)
- (6) ガンジス川中上流域のシャークラー遺跡では、北インド編年Ⅱ・Ⅲ期に併行する遺跡編年ⅡB期において、基底幅四・八〇メートル、検

出高・八〇メートルの盛土による堤状遺構が検出されている。この堤状遺構を堰堤として、この時期の治水工事の一例とする見解もある。

Indian Archaeology: A Review 1974-75 (New Delhi, 1979). Roy, T.N., *The Ganges Civilization: A Critical Study of the Painted Grey Ware and Northern Black Polished Ware Periods of the Ganga Plains of India* (New Delhi, 1983)

(7) 山崎元一「古代インド社会の研究—社会の構造と庶民・下層民—」(東京、刀水書房、一九八七)

(8) 上杉彰紀「紀元前二千年紀の北インドにおける土器の変遷」(『インド考古研究』第一六号、東京、一九九四)。上杉彰紀「北インドにおける精製土器—PGWとBRWを中心に—」(『インド考古研究』第一八号、東京、一九九七)

(9) 小西正捷「東部パンジャブにおける後期ハラッパー文化」(『物質文化』第一七号、東京、一九七二)

(10) 網干善教・高橋隆博編『マハート遺跡発掘調査概報一九九一—一九九年度』(大阪、関西大学文学部考古学研究所、二〇〇〇)

(11) 上杉彰紀「紀元前後の北インドにおける土器の様相—サハート遺跡出土資料の検討を中心に—」(『インド考古研究』第二〇号、東京、一九九九)

(12) 上杉彰紀「初期歴史時代・鉄器時代における北インドの都市」(『インド考古研究』第一九号、東京、一九九八)

(13) ERDOSY, G., *Settlement Archaeology of the Kausambi Region* (in: *Man & Environment*, IX, New Delhi, 1985). ERDOSY, G., *Early Historic Cities of Northern India* (in: *South Asian Studies*, 3, London, 1987)

(14) 山崎元一注(7)前掲書

参考文献

岩本裕「アーンリヤ世界とガンジス古代諸国家」(『岩波講座世界歴史』三、東京、岩波書店、一九七〇)

上村勝彦訳「カウティリヤ美利論—古代インドの帝王学—」上・下(東京、岩波書店、一九八四)

小西正捷「インダス文明とアーンリヤ世界の背景」(『岩波講座世界歴史』三、東京、岩波書店、一九七〇)

山崎元一「古代インドの王権と宗教—王とバラモン—」(東京、刀水書房、一九九四)

ALIGHI, F.R., *The Archaeology of Early Historic South Asia: The Emergence of Cities and States* (Cambridge, 1995)

ERDOSY, G., *The Origin of Cities in the Ganges Valley* (in: *Journal of Economic and Social History of Orient*, Vol. XXVIII, Part I, Leiden, 1985)

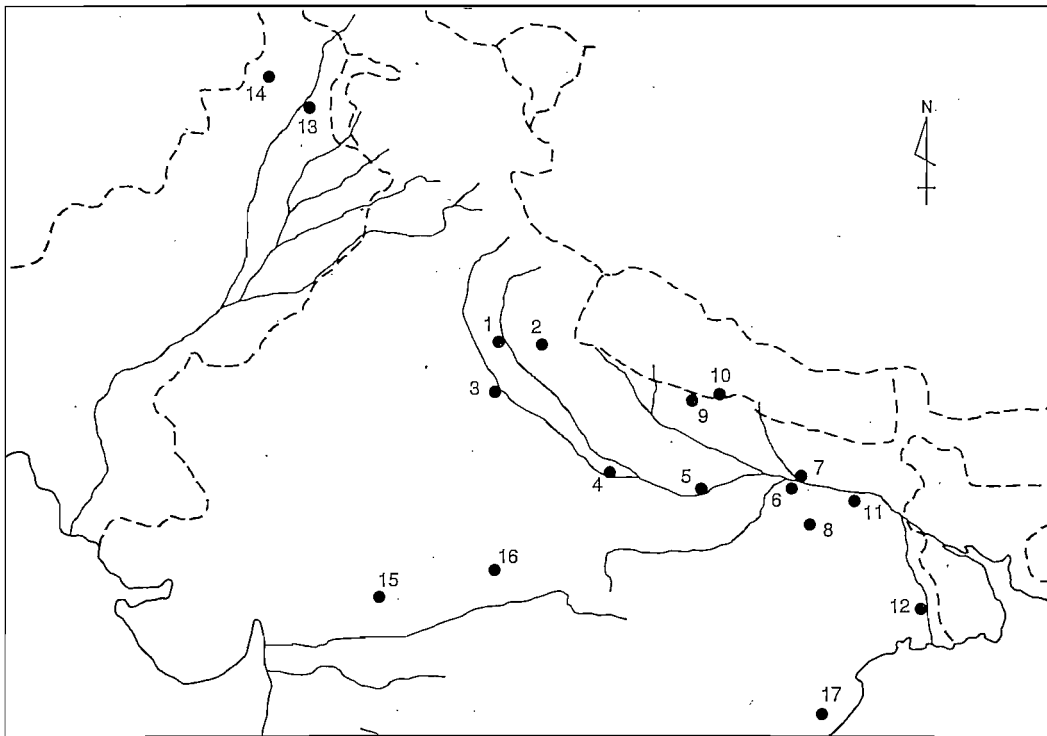
LAL, B.B., *The Painted Grey Ware Culture of the Iron Age* (in: *History of Civilization of Central Asia*, Vol. I, Paris, 1992)

LAL, M., *Settlement History and Rise of Civilisation in Ganga-Yamuna Doab from 1500 B.C. - 300 A.D.* (Delhi, 1984)

【付論】

本書第一章において、古代インドの一大国時代の王権の諸相について述べられている。それら一大国の首都を含む北インドの古代都市に比定される遺跡の発掘は、少しずつではあるが進められている。以下にそれらの都市遺跡について簡単に紹介しておこうとしたら(付図1)。

付表1には、都市遺跡と推定される国家との関係、その遺跡の面積を挙げている(遺跡の面積は ERDOSY, G., *Early Historic Cities of Northern India* (in: *South Asian Studies*, 3, London, 1987) による)。本論中でも述べたように、国家の都に推定される遺跡では、面積が一五〇—二〇〇ヘクタールものが多いが、マトゥラーは二九五ヘクタール、パターリプトラは一三〇〇ヘクタールと比べて大規模である。また、一〇〇ヘクタール以下のものも見られる。いずれにせよ、一般的な集落と推定される遺跡では一〇ヘクタール以下であることから見れば、都市遺跡がいかに大規模なものが理解できよう。



付図1 北インドにおける主要都市遺跡 遺跡番号は付表1・2に共通する。

付表1 北インドにおける主要都市遺跡一覧表

	遺跡名	主な国家との関係	面積 (ha)
1	ハスティナーブラ	クル	18以上
2	アヒツチャトラ	パンチャーラ	180
3	マトゥラー	シュラーセーナ	295
4	カウシャーンビー	ヴァツァ	160
5	ヴァーラーナシー (ラージガート)	カーシ	40
6	パターリプトラ (パトナー)	マガダ	1,200
7	ヴァイシャリー	リツチャヴィ (ヴリジ)	不明
8A	旧ラージャグリハ (ラージギル)	マガダ	200
8B	新ラージャグリハ (ラージギル)	マガダ	64
9	シュラーヴァステイー (マヘート)	コーサラ	160
10	テイラウラー・コート	シャーキヤ	20
11	チャンパー	アング	不明
12	チャンドラケートウガル	?	不明
13A	タクシラ (ビル・マウンド)	マウリヤ朝	70
13B	タクシラ (シルカップ)	インド・ギリシア、サカ・バルティア	46
13C	タクシラ (シルスフ)	クシャーン朝	137
14	プシュカラヴァティ (チャールサダ)	アケメネス朝 (?), マウリヤ朝 (?), インド・ギリシア、サカ・バルティア	6 ?
15	ウツジャイニー (ウツジャイン)	アヴァンティ	85
16	ヴィディシャー (ベースナガル)	マウリヤ朝	240
17	シシュバルガル	マウリヤ朝 (?)	144

ここに挙げた遺跡のほかにも都市遺跡の可能性を持つ遺跡が確認されているが、代表的なものに限って挙げている。遺跡の面積はERDOSYによって推定されたものを中心に示しているが、明らかに誤りと考えられるものについては、筆者の判断で訂正している。

付表2 北インドにおける都市遺跡の発掘調査による時期区分

絶対年代	北インド編年	1	2	3	4	5	6	7	8B	9	10	11	12	13A	13B	15	16	17
1000A.D.						V期		V期		VI期		VI期	VVI期					V期
500A.D.	VI期			V期		IV期		IV期		V期		V期	IV期					IVB期
A.D.	V期	IV期	IV期	IV期	III期	III期	II期		IV期	IV期		IV期	III期			III期		III期
	IV期	III期	III期	III期	II期	II期		III期	IV期	III期		III期	II期					IIB期
				II期	IC期				III期	III期		III期	II期					IIA期
500B.C.	III期				II期	IB期	I期	II期	II期	II期		II期	I期					II期
	II期	II期	II期	I期	II期	IA期		I期	I期	I期								II期
1000B.C.	I期				I期(?)													
1500B.C.		I期	I期															

網掛部分は城壁の造営時期を示す。ただし、城壁造営以後も城壁の改修が行われている場合があるが、ここでは示していない。なお、ヴァイシャーリー遺跡では、遺跡全体を取り囲む城壁は確認されておらず、表には示さなかったが、遺跡の一部であるラージャー・ヴィンジャーラ・カー・ガルというマウンドで土塁の一部が確認されており、その造営は遺跡編年 III 期に指定されている。

また、都市遺跡は大規模な城壁を特徴とするが、発掘調査によって前一千紀中葉から後葉にかけての時期に造営された例が多いことが明らかにされている(付表2)。ほとんどの遺跡が城壁の造営以前から居住されており、これらの遺跡が長期的に地域の中心であった可能性がある。

残念ながら、城壁内部の発掘調査は十分に進められておらず、都市の空間利用の実態についてはほとんどわかっていない。本論では、地域間交流という視点から都市形成期の北インド社会について展望を示したが、北インドの古代都市に関する本格的な研究は今後の調査・研究にかかっているといえよう。

(上杉彰紀)